

---

# 夢の続きに

藤枝 なお

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢の続きに

### 【Nコード】

N6967Y

### 【作者名】

藤枝 なお

### 【あらすじ】

生まれつき体が弱く、母親を亡くしてからさらにはその症状は悪化していく。ベッドから起きられない日々の中で何度も同じ夢を見た。それは、一度も会ったことのない父親の姿。夢の中では辛い現実から逃げられる。そう思ったのに、あれ？これは夢？現実？目が覚めたら見たことのない部屋だった…。

## 第1話

お母さんが死んだ。

だけど、予想はしていた。年々弱っていくお母さんは、見ていて痛々しかった。だけど、お母さんは死ぬ間際まで笑っていた。そして、私にこう言った。

『辛いことがあっても、信じていれば…きっと叶う。あなたも、お父様にきっと会えるわ』

そして、笑って死んでいった。どうしてもそこまで笑っていたれるのだろ。最後はベッドから起きられなくなっていたのに…。

お父さんは、その場に崩れ落ちて泣いていた。本当にお父さんはお母さんのことを愛していたんだ。

お母さんがベッドから起きられなくなっからは、お父さんも一緒に暮らしていたのだが、それまではお父さんは少し離れた家に一人で住んでいた。

お母さんは、身重の体でこの近くに倒れていたらしい。それをお父さんが見つけて、世話をした。そうして2人は次第に近い関係になっていったのだという。

お父さんは何度かお母さんに結婚を申し込んだのだけど、何故か結婚ということにはならなかったようだ。詳しくは教えてくれなかったのわからない。

私がお父さんと呼んでいるのは、ただ自然とそう呼ぶようになってたからなのだという。私のお父さん。でも、血は繋がっていないお父さん。私がそのことを知ったのは、物心がついてすぐの事だった。

お父さんは大好きだった。だけど、私の中の何かがこの人は本当のお父さんではないと言っていた。それをお母さんに聞いたら、お母さんは「あら、わかるのね」なんて笑っていた。そして、先程の事実を知ったのだ。

だけど、それでも私はお父さんとお母さんが大好きだったし、毎日楽しく過ごしていた。

ただ、お母さんが病気がちだったのに似たのだろう、私も小さい頃からよく体調を崩していた。それは成長するにつれて悪化していった。きつといつか私もお母さんのように衰弱して死んでいくのだろう。そう思うと怖くないわけではないが、お母さんのように笑顔で死ねればいいと思っている。

「そんなところにいると風邪を引く」

「お父さん…大丈夫よ」

お父さんは窓辺に座っていた私にひざ掛けをかけると、困ったような笑顔を浮かべて、仕事に行ってしまった。

お父さんは、お母さんが亡くなってからは仕事前と仕事の後に顔を見せる程度で、寝泊まりはしなくなった。

理由はなんとなくわかる。私がお母さんに似ているから。きっと、お父さんは私を見ながらお母さんを見ているのだろう。だからあんなに辛そうに私を見るんだ。お父さんの、お母さんに対する愛情が

感じられる。ただその一方で私の存在がなくなっていくようだった。

「つつ…！」

突如、激しい耳鳴りと頭痛に襲われる。最近よくあるのがこの耳鳴りと頭痛なのだ。その度に、微かに話し声と、耳障りなノイズのような音が聞こえてくる。いよいよ幻聴が聞こえるようになったのかもしれない。

「アリア！」

「ア、ラン…」

駆けつけてくれたのは、向かいのお店で薬局をやっている2歳年上の幼馴染だ。彼は小さい頃から私の面倒をよく見てくれた。優しく、時に厳しく見守ってくれた人だ。

「大丈夫か、とにかくベッドに行こう」

うまく歩けない私を軽々と抱き上げて、アランは私をベッドまで運んでくれた。そして、痛みが治まって眠りにつくまで手を握ってくれていた。

今は、お父さんよりもアランと一緒にいる時の方が安心する。腫れ物に触るようなお父さん。このまま一緒にいてもお父さんがおかしくなってしまう。だから、本当は私が離れた方がいいのだ。けど、この調子ではそうもいかない。

アランにも、いつも迷惑をかけてしまっている。これではいけないと思っではいる。だけど、どこかでアランに頼っている私もいる。このままではいけないのに。

夕方、目が覚めるとアランの姿はなく、代わりに手紙が置いてあった。『夕方また来る』と言だけの手紙でも、私の心を温かくしてくれた。

そして、その言葉通りいくらしもないうちにアランが来てくれた。手にはたくさんの薬草や薬。相変わらずだ。

「体はどうだ？」

「まだ頭は痛いかも…」

「そうか、何か食えるか？」

「欲しくない」

ここ数日、私は食べ物を受け付けない。食べても吐いてしまうのだ。そのためここ数日でかなり痩せた。いや、やつれたという方が正しい。

と、またあの頭痛だ。今度は今までにないくらいの痛みが私を襲う。

「おい、アリア！しっかりしろ！」

痙攣を起こしている私を、アランが呼び戻そうと必死に呼びかける。それでも、この激しい痛みには私は意識を失いかけた。その時、

アランが私をきつく抱きしめた。

「ダメだ！戻って来い！」

その言葉に、意識を失いかけた私だったが、どうにか遅い来る痛み  
みの波に耐えることができた。

「よかった…」

「アラン…ありが…」

私の言葉も聞かず、アランは再び私の体を抱き寄せる。そして震えながら耳元で言った。

「アリア、よかった…」

「アラン…」

アランはしばらく抱きしめた後、私の目を真っ直ぐに見つめる。  
いつものアランではない様子に、私も緊張しながら見つめた。

「アリア。俺と結婚しよう」

「…アラン…？」

告白を通り越したプロポーズに、私は文字通り目を丸くしてしま  
った。

「いや、ごめん。気が早いよな。でも、俺はアリアが好きだ。守り  
たいんだ…！」

返す言葉がなかった。私の心の奥に秘めた想い。アランが好きだ  
という気持ち。まさかアランも同じ気持ちを持っているとは思わな

かった。

だけど、アランにこんな重荷を背負わせてはいけない。もう永くないのは分かっているのだから、悲しむ人を増やしてはいけない。

「ダメ……」

「アリアが断る理由は、俺が嫌いだからじゃないよね」

「え……」

「アリアの事だ。どうせ心配かたくないと言う理由だろう。それは受け付けない。結婚はまだ早いと思うけど……でも、俺の気持ち、知っておいて」

そう言うつと、アランは照れ臭そうにして食事を作りにキッチンに行ってしまった。

その後ろ姿が、とても愛おしく思えた。アランのことを考えるとアランの気持ちを受け入れてはいけない。だけど私は気持ちを止められなかった。

歓喜と少しの罪悪感を抱えながら、その日は眠りについた。

## 第2話

翌日はよく晴れていて、久しぶりに温かな日差しが降り注いだ。こんな日は外に出たくなってしまうが、お父さんからアランからも大反対されてしまった。

昨日、仕事を終えたお父さんにアランが私とのことを話した。意を決して打ち明けたんだけど、意外にもお父さんは驚かなかった。

お父さんは一言、『アリアをよろしく』とだけ言った。まるで自分の役目は終わったと言わんばかりに。

もしかして、翌日からは来てくれないのではないかと思って心配したのだけれど、ちゃんと来てくれた。やっぱり血は繋がっていないくても、お父さんはお父さんなんだと思った。

「ねえ、本当にダメ？」

「外？」

「うん」

「どうしても出たい？」

「うん！」

もしかして！と思って期待していたら、アランは私の額に手を当てて、そして一言。

「ダメ」

今日は熱の方が…。私でさえ気が付かなかったのに、どうしてアランには分かってしまうんだろう。

消化に良い食事と、アランの家からもらった薬を飲み、ソファに腰かける。調子のいい時は窓の外を眺めながら、ソファに座って編み物をするのだ。

小さい頃から外に出られなかった私は、編み物ばかりしていた。お母さんに教えてもらった編み物は、今ではかなりの腕前になっている。

お母さんも外に出られない分、編み物や縫い物をして、生計を立てていた。私もそれに倣って、編み物をして、それを売っていた。もちろん売りに行くのはお父さんだったんだけど。でも自分の作ったものが売れるというのはすごく嬉しくて、なんだか少し大人になった気がした。

そういえば、今日はあのノイズみたいな音や変な声は聞こえない。私の体調と何か関係があるのだろうか。

「やっぱり耳鳴りと幻聴かな…」

そう考えると全てが解決するのだから。でも、単なる耳鳴りと幻聴では納得がいかない。何が納得いかないのか自分でもよくわからないのだけど、何かが違うのだ。どこか胸騒ぎがするというか、何かを待っているような…。

待っている…そう、私は何かを待っている。何を待っているの？自分の事なのに分からない。そんな感覚がここ数日は強くなっている。いつからかと問われれば、間違いなく、お母さんが亡くなったからだろう。

もしかして、お母さんが呼んでいるの？とも思ったが、なんとなく違う気がする。お母さんは私を向こうに呼んだりしない。

「怖い顔して何考えてるの？」

「アラン…。なんでもないの、ただちょっと疲れちゃったかな」

「朝からずっと編んでるもんね。そのマフラーどこまで伸ばすんだ？」

「え、きゃっ！」

言われて手に持っているマフラーを見ると、3m近くの長さになっていた。ああ、もったいないけど、適当な長さにまでよく。

次は何を作ろうか。お母さんが好きだった、ポンチョでも作ろうか。よく自分の作ったポンチョを着て、編み物をしていたお母さん。前のは古くなったから、最後に着ていたのは私が作ったものだった。

タンスの奥からそれを取り出して着てみた。お母さんの香りがする。少しだけ体が楽になった気がした。アランがお店に戻ると、私はまた編み物に没頭した。

かなりの時間集中していたようで、ふと気が付くと辺りは暗くなり、ポンチョを含めて帽子や靴下など大量にできていた。少しやりすぎたかもしれない。だが、体の調子が良い時に作っておかないと、間に合わないのが実態だ。

「ジゼル…？」

「あ、お父さん。お帰りなさい」

「あ…ただいま。アリア、その上着は…」

お父さんは私の着ていたポンチョを指差して言った。

「お母さんのよ。これを着たらなんだか体が楽になった気がする」  
「そうか…。今日は調子が良さそうでよかった。私はもう帰るよ」  
「え、もう?」

「ああ。おやすみ」

「おやすみなさい…」

それから、お父さんはあまり家に足を運ばなくなった。それでも一日1回は顔を出してくれるが、それも短時間になってしまった。

アランに相談して、お父さんに聞いてもらっても、ただ「忙しい」や「風邪をうつしてはいけないから」というばかり。

「私、何か嫌われるようなことをしちゃったのかな?」

「そんなことないだろ。心配されたくなくて来れないんだよ」

アランはそう言って励ましてくれるが、私はどうも嫌な予感がしていた。そして、それは当たってしまったのだった。

あの日から1か月。もう外は真っ白な雪景色だ。最近ではお父さんは顔も出してくれなくなった。

心を痛めていると、アランがバタバタと走って私の部屋に入って

来た。

「どうしたの？そんなに急いで」

「どうもこうも！これ！」

アランが差し出したのは一通の手紙だった。差出人はお父さん、そして宛名は私だった。

「今玄関でこれを見つけたんだ」

恐る恐る封を開けると、そこには見慣れた文字でびっしりと文字が書かれていた。お母さんと出会った時の事、私が生まれた時の事、私の成長していく過程など、事細かに書かれていた。お父さんが自分の子どもではない私を愛情もって育ててくれたことがよくわかる文面だった。

手紙の最後には、こう書かれていた。

『私はジゼルを心から愛していた。それ故に、ジゼルが死んでからは、日に日にジゼルに似ていくお前を見ていられなくなってしまった。本当にすまない。アラン君と幸せに・・・』

それを読んで、私はショックよりも、「ああ、やっぱりな」という思いの方が強かった。あのお父さんの表情は、私に対する愛情よりも、戸惑いの方が強かったのだから。

手紙を読んだアランは酷く憤慨したが、私はこれでよかったと思った。お父さんのためにも、私のためにも。

ただ、一つ残念なのは、お父さんも私の本当の父親について何も

知らなかったということだ。お母さんが私に教えてくれなくても、もしかしてお父さんは知っているかもしれないと思っていたから。

だけど、お母さんはお父さんに何も話さなかったという。ただ、一度だけ口を開いたのは、お母さんがお父さんと出会ったその日に発した言葉だけだった。

『愛した人の子どもと一緒になら、大丈夫』

私はお父さんの手紙で、このことを初めて知った。そして、お父さんの手紙の中の言葉を思い出した。

『私はジゼルを愛していたが、ジゼルが私に対して抱いていた感情は、家族に対する愛情と一緒にだった。ジゼルが心の底から愛したのは、アリアの父親だけだったのだろう』

だからお母さんは自分の体調が悪化するまで、お父さんと一緒に暮らすことを拒んだのだ。だから結婚を申し込まれても頑なに断ったのだ。

疑問が一つずつ解消されていく中で、私の中のある想いが強くなっていた。

『本当のお父さんに会いたい』

お母さんが最後まで愛し続けた人。どうしても会いたい。

### 第3話

お父さんが姿を消してから、私の体調はどんどん悪化した。アラ  
ンが言うには精神的な要因もあるとのことなのだけれど、それにし  
ても酷かった。

しばらくはベッドから起き上がれない日々が続いたし、そんな私  
を献身的に看病してくれるアランにも疲労の色が見て取れた。

こんな時、お父さんがいてくれたら…。目を閉じると浮かんでく  
るのは姿を消したお父さんの姿と、まだ見ぬ本当のお父さん。

どんな人なのだろうか。私と似ているのだろうか。何をしている  
のだろうか。どこに住んでいるのだろうか。そして、私のことを知  
っているのだろうか。

この頃から熱でうなされていると、知らないはずの本当のお父さ  
んの声が聞こえてくることが多々あった。それも以前よりも鮮明だ。  
単なる夢だと分かっているのだけれども、夢の中で私は『お父様』  
と嬉しそうに笑っていた。

そうか、本当のお父さんは『お父様』って呼ばれているのね。大  
きな背中に私と同じ金色の髪の毛、顎の髭がダンディだわ…。

16歳にもなって、お父様の膝の上に座って楽しく話をしている  
夢を見るなんて…。目が覚めてからいつも恥ずかしくなってしまう。  
けれど、どこか嬉しい。本当に金髪で、髭があるなんてわからない  
のに。

『アリア』

そう呼ぶ声が懐かしいと思うのは、きっと私の願望だからなのだろう。

ベッドから動けない私の楽しみは、編み物からこの夢の中でのお父様との触れ合いに代わった。

『アリアは何が好きなんだ？』

『私は編み物が好きなの。この前はポンチョを編んだのよ』

『ジゼルに似たのだな。ジゼルもよく編んでいた』

夢の中で、お父様は優しく頭を撫でながら言った。相変わらず顔は何故か見えないが、それでも私に流れる血が、この人が父親だと言っていた。

『お父様、どうして私はお父様のお顔を見れないの？』

『…すまない。もう少し待ってくれ。そうしたらきっと迎えに行くから』

『絶対？』

『もちろんだ』

『わかったわ。約束ね』

小さい子みたいに指切りげんまんをして、お父様に抱きついた。

ただ、その体はどんどん薄くなっていく。今日はここまでのよう  
だ。

「アリア…！」

目を開けると、アランが心配そうに私を覗き込んでいた。

「どうしたの？そんな顔をして」

「いや…寝言を言っていたから…」

「寝言…きゃっ！」

アランは私が起き上がるなり私をきつく抱きしめた。

「どうしたの、苦しっ…」

「行くな」

アランは顔を上げることなく言った。

「どこにも行くな！行っちゃダメなんだ…！」

「アラン…」

私は、彼のその言葉に何も返すことができなかった。

「お前が、本当の父親に会いたがっていることは分かっている。だ

けど、俺は…」

そこまで言っつて、アランは言葉を詰まらせた。きつと心優しいアランのことだ。これ以上は言っつてはいけないと思っつたのかもしれない。でも、その気持ちは痛いほど伝わつた。

「アラン…」

私はアランを束縛してはいけない。まして、もう永くはないのだから。

「私、アランの事が好きよ」

だからこそ、アランには幸せになつてもらいたいのだ。

「だから、もうここへ来てはダメ」

それが1番なのだ。誰にでも優しくて、気が利いて、頼れるアラン。町の人からの人望も厚い。そんな彼を私が独り占めしてはいけない。

「嫌だ。それだけはアリアの願いでも聞けない」

「でも、このままじゃアランのためにならない…」

「俺のためになるかならないかは俺が決める。今日は帰るよ。明日…また来る」

私の反論を受け付けることなく、アランは帰つて行つた。

最近、私は思ふのだ。アランは私を好きだと言つてくれているけれど、それは責任感から来るものではないのかと。また、お母さん

がお父さんに対する情が家族への愛情だったように、私に対する愛情は、家族に対するそれなのではないかと。

それが私の不安や罪悪感からそう思うのかもしれないが、本当に彼が私のことを好いてくれているのであれどうであれ、私と一緒にいてもこの先の未来はないのだ。だったら、早く心の優しい彼を解放してあげたいのに。

「どうしたらいいんだろうね…」

『どうした？元気がないな』

『うん…実はね…』

また同じ夢の中で、私はお父様にアランのことを相談していた。これまで、私の体調がずっとすぐれないことは言っていなかったのですが、お父様はとても心配してくれた。

『いつから体調が悪いんだ？』

『昔から…。それでも小さい頃は外で遊べたのよ。だけど、最近はずっとベッドから出られないの』

『そうか。その青年…アラン君と言ったか。彼もアリアのことを好いてくれているんだな…時間がないか…』

『え？』

『いや、何でもない』

お父様の最後の言葉は聞き取れなかったが、アランのことを話したら、どちらの気持ちも分かると言って、一緒に悩んでくれた。それだけで、私の気持ちは少し軽くなった。

『お父様…私、早く死んでしまいたい…』

『何を言い出すんだ』

『だって、もう歩くことすらままならないし、このままだとアランまで倒れちゃうし…お母様のところに行きたい…』

『そんなことを言っではいけない。…お前の体はやはりそちらの水に合わないのだな』

今度はお父様の呟きも聞き取れた。

『やはりって…』

『お前の体はそちらの水によって徐々に蝕まれていつている。ジゼルがそうであったように…。今日話を聞いていたがもう限界だな。ようやく見つけたんだ。手遅れになる前にお前をこちらに連れ戻す』  
『え、ちよつと待って！言っている意味が分からないわ！』

いきなり水が合わないとか、蝕まれているとか、果ては連れ戻すだとか…！そもそもお父様はどこにいるの？第一これって夢じゃないの？

「意味わかんない！」

飛び起きた私の体は、既に黄金の光に包まれていた。そして、光の中心から出てきた腕に、体ごと引きずり込まれた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6967y/>

---

夢の続きに

2011年11月21日09時40分発行